

人生何度目もの大地震 1

OWCC 中川和道 20240113

2023年末に八ヶ岳小同心を登り、早めに帰宅したら、2024元旦に能登半島地震。お正月に、何ということだろう。老クライマー中川にできることはもう多くはないが、何とか支援しよう。合わせて、これまでの大きな地震体験を登山者の目で思い起こし、語り継いでいこう。

阪神・淡路大震災 19950117-5:46 MW=7.3 死者6434名 被害額10兆円規模

市役所に勤務しておられたクライマー仲間Aさんのことを、ぜひ、語り継ぎたい。職員を災害支援に公式に派遣する動きが一般化する前だ。Aさんは間髪を入れず休暇をとった。すごい。ソロテンを担いで神戸市北区だったっけ、交通寸断による孤立地域に5時間ばかり歩いて入った。もちろんボツカ態勢でだ。避難所の片隅にソロテンを張り救援活動をした。2024年1月6日NHK「石丸謙二郎の山カフェ」で紹介のとおり、登山者には多くの「小技」がある。Aさんもそれを存分に発揮した。(1)まずたき火、次に(2)薪を燃やして大鍋でご飯やみそ汁を複数分作ったが、電気釜ガス釜の自動調理しか知らない方々には高いハードル。水加減火加減とはと丁寧指導し、自分たちでできるようになったら、はい、次の避難所に移り、また自立調理を伝授していったとお聞きした、(3)水が不自由な現場で食器や調理器具を洗うのに、紙で拭いてきれいにしたら目を丸くして驚かれ、これはいいと直ちに習得してくれた、(4)食品の油脂は融点60℃だからお湯でとかし、えいっと捨てれば洗剤ほぼ要らず、紙で拭けばそれでよし。私ら、山でいつもやってるやん。(5)Aさんは、水を濾過して飲み水にすることもやったらしい。(6)さらに、彼は優れたリーダー。個人々々の得意を見抜いて役割を振り、達成感をもってもらいながら集団で作業をやったと聞いた。

慌ただししい昼が過ぎた何日めかの夜、避難所の方がAさんのソロテンに来て尋ねられたという、「Aさん、給料も出ないのに、何で、ここまでやってくれるんですか?」「ワシは今体が動くいろいろな役に立つ知識も多い。だから、みんなを、今、助けている。ワシが年取って動けない時に災害に遇ったら、あんたらとかあんたらの子どもに助けてもらいたい。世は『助け助けられ』だ。よろしく頼む。」とAさんは答えたらしい。その方は「いや、これで気が楽になりました。今は、ぜひ、助けて下さい」と言われ、いい雰囲気だったという。OWAFの若い仲間、ぜひ、語り継ぎたい。Aさん、あんたは偉い!と。

中川はその頃、神戸大に泊り込み、震災対応に連日あたっていた。同じことを感じていたものだ。中川もAさんも今は70代半ば。助けてもらわないとダメな災害には、幸い、遭わずにこれまではすんできた。今回の能登半島地震、何か、やれることをやっておこうと、阪神・淡路大震災を思い出した。

労山全国の行動は速かった。1点だけ事例をあげると、ロックガーデンの崩壊実状の調査が『登山時報』誌に載り、労山の本気度を実感した。編集長は西本武志さん。川上洋子さんも調査にご参加でしたっけ。

東日本大震災 20110311-14:46 MW=9.0 死者22318名 被害推定額16-25兆円 放射線被害

登山者として、放射線の専門家として、中川が歯ざしりせんばかりに悔しかったことを1点、あげておく。それは、復興にあたる重機のガソリンが底をついていたが、放射性セシウムが舞う地域で放射線被害を避けてガソリンを輸送する方法はないとされたため、ガソリンスタンドが空になり、被害が拡大してしまった状況を見てのことだった。皆さまの生活実感のとおり、現在の自動車の換気性能は極めて高く、トンネル走行のさい、粉塵や匂いを人間が吸い込むことはない。車のドアを開けたり外に出てホコリを身にまとうことさえ避ければ、ガソリンを届けることは、放射線科学の観点からは、可能であった。放射線化学会会長をやっていた中川はこの旨を発言しようとしたが、機会を逃した。悔しくてたまらない。聞けば、広島大原爆研究所の星教授も同じ見解だったらしい。深い後悔を胸に、中川は、福島放射線測定を今も続けている。